

入試問題分析

【出題形式】

やや短い問題文が出題される。ただし増減はあり。出題ジャンルは評論文が軸となっている。設問のレベルは標準的といえ、また本文の内容は必要以上に難しいといったものではなく、学生の学力を問うのにふさわしいレベルとなっている。またこのようなレベルの文章を正しく読解することは、大学生活の中で触れていく書物を読むうえでも必要だと思われる。

受験生の心得として、文章を正しく理解するためには、語彙力を増やし、的確に筆者の言いたいことをつかむ練習をする必要がある。

設問に関しては読解力を問うものと、語彙力を問うものがバランス良く出題されている。問題文同様、設問に関しても、必要以上に難しくしたりせず、しっかりとした基礎力を身に付けておけば結果が残せるようになっていくといえるだろう。

このように奇をてらった設問にせず、また大学入学後に必要な読みごたえのある文章が理解できているかを問う、大学受験にふさわしい良問を出題しているといえる。したがって小手先のテクニクで乗りこえようとせず、誠実に読解力を鍛えていくのが一番の対策となるだろう。語彙力をしっかりと身につけ、学校や予備校などを通し、正しい力を養ってほしい。

【受験のポイント】

(講義の中で重要だと思ったことを自由に記入してください)

第一問 次の文章を読み、後の問一～問八に答えよ。なお、解答はすべてマークシートに記入すること。

私たち人間は誰でも、この世に生きていくとき、必ずなにかをつくり出し、それによって自己を表現している。なにかをつくるというと、ふつう手仕事や、でなければ工場労働の機械をつかつての生産を、また自己を表現するというと、芸術家の仕事や、でなければ趣味としてやっている俳句や短歌や陶芸など、そういったものだけを、ひとは考えがちである。けれども、ここでいうのは、^Aもつと広い意味でつくり出すことであり、表現である。広い意味でいえば、およそ私たちは、なにもつくり出す、なにも表現せずに生きていくことはありえないし、生きていくことはできない。

たとえば、^①キョクタンな話だが、ここに、来る日も来る日も一日中自分の部屋に閉じこもって、誰にも会わず、なにもしないひとがいたとする。自分でこれに似たようなことをしたところのある人たちもいるだろう。また、こういうひとを身近に知っている人たちも少なくないだろう。このひとは一見したところなにもつくり出す、なにも表現していないように見える。たしかに積極的にはなにもつくり出す、なにも表現していないかも知れない。そういう人間を指して（^B無為徒食）という言葉もある。漱石の小説のなかに出てくる（高等遊民）というの、高等という形容詞こそ付いているが、似たようなひとを指している。

だが果たしてそういうひとは、なにもつくり出す、なにも表現していないだろうか。必ずしもそうとはいえない。なんとすれば、そのような人たちのうちのもつともひどいひとの場合を考えても、そのひとがどのように振る舞うとき、そこに家族やまわりの人々との間にやはり一種独特の関係をつくり出し、出しているからである。また、その関係をおし（^C変わり者）あるいは（人間嫌い）として自分を表現しているからである。どうしてこのようなことになるのだろうか。思うにそれは、私たち人間の一人一人が、この世に生きていくかぎり、すでになんらかの人間関係、社会関係の網のなかで、同じことだが或る一定の意味の場Ⅱ文化のなかで、生きていくからであろう。

私たちの一人一人は、ただ個人として在るのでないばかりか、単に集団の一員として在るのでもなくて、^Cそのよ^うな意味をもつた関係のなかにある、とこそいわなければならない。^D自分では社会や政治にまったく関心をもたなくとも、私たちはそれらと無関係でいることはありえないことにもなるのである。むしろそれは、物理的、自然的な関係ではなくて、意味的、価値的な関係である。そうした関係のなかでは、すべての態度、なにもしないこととさえ、いわば一つの行為になり、なんらかの意味を帯びてくる。

そのことをきわめて鋭く捉え、表しているのは、現代芸術である。たとえば或る画家は、白い便器になにも加工せずそのまま「泉」と名づけて、展覧会に出品しようとした（マルセル・デュシャン）。また或る作曲家は、ピアノに対して演奏会場のステージのピアノの前にもむろに腰を掛けさせて、それを「四分三十三秒」と名づけた（ジョン・ケージ）。一風変わったこの二つの例が現代芸術にとつて画期的な（^E作品）であるとされるのも、そこにあるのが単なる奇抜な思いつきではなくて、それをこえたものだからである。展覧会場や演奏会場という特定の意味場そのものを生かして、つくることや表現することのなんたるかを、^E根本から問いなおしたのだからである。

このように私たち人間にとつて、なにかをつくり出したり表現したりすることは、なんら特別のことではない。それは、生きるということとほとんど同義語でさえある。

ところで私たちは、そのようにして生き、なにかをつくり出し、表現していくとき、否応なしに、日常生活のなかで自分をとりまくものについて、自分の感じたこと、知覚したこと、思ったことにとつたり、それらを出発点としな^Fいわけにはいかない。もつとも能動的な制作や創造や表現についても、やはりそうである。もとより複雑化した世界に積極的に対処して活動するためには、いろいろとそれなりに立ち入った知識や理論や技法が必要とされるだろう。けれどもそれらの知識や理論や技法は、日常生活のなかで何気なしに自分が感じ、知覚し、思ったことと結びつくことなしには、生かされることができない。たとえ、それ自身としてどんなにすぐれた知識や理論や技法であっても、その結びつきを欠くときには現実と十分に噛み合わず、^F宙に浮いてしまうことになるだろう。それらが私たちにとつて内面化されず、私たち自身のものにならないからである。知恵の^③ソウシツといわれることも、^Gそこから出てくる。

いや、もともと、知識も理論も技法も私たちの一人一人によってよく使いこなされてはじめて、すぐれた知識、理論、技法になりうるのだから、厳密にいえば、およそ私たち、一人一人の日常経験とまったく切りはなされた、それ自身としてすぐれた知識や理論や技法などというものは、どこにも存在しない。

（中村雄二郎「共通感覚の再発見」による）

(注)

- 1 マルセル・デュシャン——フランスの芸術家。
- 2 ジョン・ケージ——アメリカの作曲家。

問一 本文中の①②③のカタカナ部で、傍線を施した部分に相当する漢字は何か。同じ漢字を用いるものを、それぞれのア～オの中から一つずつ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は①|| 1、②|| 2、③|| 3)

① キョクタン

- ア 彼はタンのものと言う人だ。
- イ タンなる冗談ではすまされない。
- ウ これはタン精込めて作られた。
- エ 第一次タン検隊の成果は大きい。
- オ タン当者の変更があったようだ。

② チョウシユウ

- ア 失敗して人々からチョウウ笑を買った。
- イ この機械は少しチョウウ整した方がいい。
- ウ かなりチョウウ戦的な言葉で批判した。
- エ 必ずアルプス登チョウウに成功したい。
- オ 私語を慎み、静かに拝チョウウしなさい。

③ ソウシツ

- ア その男は陰シツな表情で見つめた。
- イ すぐに保健シツに行った方がいいよ。
- ウ シツ行部の意見には批判も出た。
- エ そのことはすっかりシツ念していた。
- オ 彼らは何度もシツ疑応答を繰り返した。

問二 本文中の傍線部A「もっと広い意味」とはここではどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は4)

- ア 手仕事ばかりでなく、工場労働などの機械をつかつての生産全体を捉えること
- イ 芸術を自己表現としてだけ捉えず、人間が生きていく行動そのものと捉えること
- ウ 私たちがつくる表現と、生きていくための労働・芸術とを同義的に捉えること
- エ この世に生きていくとき、なにかをつくり出しながら、自己の表現を捉えること
- オ 趣味としてやっている俳句や短歌や陶芸などではなく、芸術全体を捉えること

問三 本文中の傍線部B「無為徒食」の最も適切な用法は次のア～オの中のどれか。一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は5)

- ア あの男は親の遺産をあてにして、無為徒食の日々を過ごしている。
- イ 彼女は志が高く、安きに迎合しない無為徒食の職を追い求めている。
- ウ 無為徒食の人生は、高潔な精神に支えられてはいるがかなり困難が多い。
- エ 経済的に苦しい青春時代を過ごしたが、無為徒食の精神で頑張りぬいた。
- オ 親の遺産は一切あてにせず、彼は無為徒食の高潔な人生をつらぬいた。

問四 本文中の傍線部C「そのような意味をもつた関係のなかにある」とは具体的にどんなことか。その内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は6)

ア 私たちは単なる個人や集団の一員として在るのではなく、一定の意味の場を共有している。
イ 社会や政治に関心をもたなくとも、私たちはそれらと関係を持つことに常に協力している。
ウ 個人が社会で目指す関係は物理的、自然的な関係ではなく、意味的、価値的な関係である。
エ 意味的、価値的な関係のなかで、すべての態度は一つの行為になり、個人の存在は弱まる。
オ 何もしない変わり者も「人間関係」の網の中に生きている存在として位置づけられている。

問五 本文中の空欄Dに入る語句は何か。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は7)

ア とは言え イ ただし ウ だからこそ エ しかしながら オ それとは別に

問六 本文中の傍線部E「根本から問いなおしたものの」の具体的内容はどのようなことか。その内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は8)

ア 展示会場や演奏会場という特定の意味場を生かして表現する作品だけが、芸術と言えるという主張
イ 奇抜な思いつきではなくて、それをこえて、特定の意味場そのものを生み出す芸術の必要性の主張
ウ 人間にとって、何かをつくり出したり表現したりすることは、芸術の本質と変わらないという主張
エ 創作や表現の意義を再考し、自分の知識や理論などを日常生活の中に結びつけるべきだという主張
オ 能動的な制作や創造的表現とは、生きるという表現とまったく同じことだという特異な芸術の主張

問七 本文中の傍線部F「宙に浮いてしまう」とは具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は9)

ア 日常生活で何気なしに自分が感じ思ったことなどは、知識や理論として生かされることができない。
イ どんなにすぐれた知識や理論や技法であっても、日常生活との結びつきだけでは芸術にはならない。
ウ 日常生活が、私たちにとって内面化され、私たち自身のものになれば、芸術作品は必要にならない。
エ 能動的な制作や創造や表現は、日常生活の「知識や理論や技法」と芸術とが結びつかねばならない。
オ 自分の感性や思いなどは、日常生活の中に知恵として結びつかなければ、現実的有用性を持たない。

問八 本文中の傍線部G「そこ」という指示代名詞は具体的に何を指しているか。その内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号をマークせよ。(解答番号は10)

ア 知識、理論、日常経験などが宙に浮き、結びついていないこと
イ 日常生活の中で有用となる知識や理論、技法が存在しないこと
ウ 知識や理論、技法が内面化されず、私たちのものにならないこと
エ 日常経験と切り離された知識や理論、技法などが生まれること
オ 一人一人によってよく使いこなされていない日常経験があること